

学位審査報告書

新制

人

107

(ふりがな)	いなだ まさみ
氏 名	稲田 雅美
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 433 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
(学位論文題目)	
ミュージックセラピーの実践におけるセラピストのあり方についての研究 ー精神分析の関係理論を踏まえてー	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 新宮 一成 副査 教授 岡田 敬司 副査 教授 小山 静子

人間・環境学研究科

(論文内容の要旨)

本論文は、欧米にその理念と実践の起源をもつミュージックセラピーの意義を明らかにし、セラピストの適切な音楽的介入と、その結果としてのクライエントの治癒的反応について、精神分析の関係理論を通して考察したものである。第二次世界大戦の帰還兵に対するリハビリテーションとして、米国の病院が音楽活動を導入したことに端を発するミュージックセラピーは、長らく行動療法的なアプローチにより、その効果を実証してきた。また、音楽活動の形態の多様化や、セラピーが適用される障害や疾病の拡大化は、ミュージックセラピーが世界各国で認知され、体系化されて、研究領域として確立される推進力となった。しかし、音楽自体が人間の内的生活に及ぼす影響や、セラピストとクライエントの関係性の中で生じる治療効果について議論する理論的基盤は未だに十分とは言えない。本論文は、精神分析の関係理論、とくに母子関係理論を基盤に据えることにより、これらの点を議論し、精神医療領域におけるセラピストのあり方を方向づけると同時に、治療の場における音楽の役割や価値について明確化するものである。

本論文は2部構成である。第1部は、ミュージックセラピー固有の技法としての即興演奏の枠組みを明らかにするとともに、即興演奏を実施するセラピストの役割について、「母親の機能」に対応させながら4章にわたって多角的に論じるものである。

1章では、即興演奏はセラピストとクライエントの間の“対話”であり、早期母子関係における「情動調律」に相応する非言語的交流として重要な役割を果たすこと、また、クライエントの音楽表現に反映されている恐怖や不安を軽減し、彼らの心的統合を導くために、セラピストの「コンテインメント」機能が必要であることについて言及している。

2章では、精神科リハビリテーションにおける事例をもとに、即興演奏時に導入する視覚素材がセラピストの機能を果たしうることを明らかにしている。すなわち、既成の視覚作品（イラスト）が即興演奏の“テーマ”として採用されることにより、グループ演奏におけるクライエント間の音楽的相互作用が促進されるとともに、それらの視覚作品は、セラピストの「抱える機能」を代替し、クライエントが「遊ぶこと」へと自らを導く手がかりとなることを論じている。

3章も精神科リハビリテーションにおける事例をもとにしたものであり、グループ演奏における特定のクライエントの演奏様態の変化を軸に、集団療法としての音楽活動の意義について探究している。一人のメンバーの、自己の脆弱性を隠蔽する方策、あるいは外部からの侵襲に対する自己防衛として作用する高度な音楽表現が、周囲の状況を読みつつ他者の音を下支えする“響き”へと徐々に転換する様相を描き、その変化は、クライエントがセラピストをモデルとして、その「コンテインメント」機能を内在化することにより生起することを見出している。

(論文内容の要旨)

4章では、臨床の場における即興演奏を「病いの語り」とみなし、それらがセラピストとの音楽的相互作用を通して“語らい”となり、さらに文化的体験へと変容することを論じている。その論旨は次のようなものである。即興演奏は、クライアントが属する文化に支えられることによって“語り”となる一方で、文化は語りの表現様式を拘束する。クライアントはセラピストとともに音楽を紡ぎ、“語ろう”ことを通して、包容力と拘束力という文化の相反する機能と折り合いをつける。「病いの語り」は最終的に文化的体験となって、彼らが自己の存在の連続性を獲得することに貢献する。

第2部は、シニフィアン概念を適用して音楽と言語構造の関連を解明しつつ、クライアントを「関係性」の世界に導き入れるためのセラピストの役割について、2つの章を立てて議論するものである。

5章では、音楽の成立において、言語象徴化作用を支える根源的シニフィアンに対応する「根源的律動」を想定し、その作用について、Lacanの言説やDeleuze & Guattariの芸術論に依拠しつつ、根源的律動が機能していないと見られる統合失調症者をシニフィアンの連鎖に導き入れる可能性について論じている。ここで見出されることは、「シンクロニー」の経験によってのみ確かめられる根源的律動の存在をクライアント自身が感じとるために、セラピストは音のカオスから発してシニフィアンとしての「リトルネロ」を形成する音楽をクライアントとともに形づくる必要性である。

6章は、シニフィアンの漂いの中で、クライアントが「機知」を生起させる様相を、クライアントの“病的”な行為の奥に存する自己治癒的な側面と関連づけて論じるものである。すなわち、時として唐突な行為、あるいは一見脈絡のない連続的行為は、蓄積された体験の断片が彼らの心の内奥でアルファ要素化される手前にある要素群であり、セラピストの「アルファ機能」の発動による十全な立ち位置が、クライアントの病的な表現形態を創造的な表現要素へと変換することを明らかにし、「機知」の形成をその一つの具現化と捉えている。

(論文審査の結果の要旨)

今日、「音楽療法」の呼び名をもつ活動が病院や福祉関連施設において導入されることは珍しくなくなっているが、それらは娯乐的、気晴らし的な活動を期待されていることが多い。あるいは、音楽療法とは特定の音楽を聴くことによって、生理的、心理的に良好な変化をもたらすことを期待する治療法であると誤解されている向きもある。本論文は、欧米にその理念と実践の発端をもつミュージックセラピーの理念と意義を明らかにすることによって、臨床の場に安易に設定されている「音楽療法」とは一線を画し、ミュージックセラピーにおけるセラピストの適切な音楽的介入と、その結果としてのクライアントの治癒的反応について、精神分析の関係理論を通して考察したものである。本論文は2部構成となっており、その展開は以下のとおりである。

第1部では、ミュージックセラピー固有の技法としての即興演奏の枠組みを明らかにするとともに、即興演奏を実施するセラピストの役割について、「母親の機能」を参照しながら、即興演奏のあり方が4章にわたって多角的に論じられている。

即興演奏の成立は、母子の間の音声的交流をモデルにして論じられている。音楽的感性の心理的起源を母子関係に求めるモデル化そのものは、時に応じてこれまでも理論家の間で行われてきた論法である。しかし本論文では、単に音楽的な能力を獲得する子どもの発達という視点を越えて、病気の人々の音楽特性をどのように協同的なものに変えてゆくかということが主題となり、即興演奏への接し方に、母親の機能の概念が有効に生かされる。

すなわち、セラピストは、不安、恐怖、そして内的葛藤が反映されたものとして生硬な音作りに陥りがちな、即興演奏における病者の表現特性を読み取り、彼らと共に行う演奏の中にそれらの特性を取り込みながら、それらを変容させて、協働の場へと差し向けていく役割をもつ。このことについては、精神病理学的な表出にどのように接するかに関する Winnicott や Bion の精神分析理論が参照される。これらの著者たちも、音声が象徴化され概念化されて使用可能な形になることを観察するにあたって、母子関係のモデルを引証しており、本論文では、即興演奏における音楽の質の変容のプロセスが、それらの治療論的枠組みを用いて解明されている。

この解明にあたって、本論文の著者は、セラピーにおけるセラピストの位置の取り方がどのようなものであるかということについて、意識的に検討し、具体的な試みを行っている。その一つは、即興演奏を促進する媒体がセラピストであるとするれば、人間以外の他の媒体もまた、即興演奏を促進するであろうということである。著者は、シンプルな画風で知られる画家の絵を参加者に呈示し、それをきっかけにして即興演奏を活性化することに成功している。患者にとって外側の存在であるセラピスト個人ばかりではなく、参加者の内面の知覚をいわばセラピストと患者との間の繋ぎ役として活用する方法は、異なる知覚モード間での総合の治療的意味という点でも、興味深い試みである。

また、著者は、参加者の中に通常の意味で音楽的な能力を有している人がいれば、その

(論文審査の結果の要旨)

存在を無視することはない。著者はその条件を、音の変容を旨とする即興演奏の場の全体に生かす方法を考える。音楽的な能力を有している人は、初めはこのような場で自己の能力を誇示することに走りがちであるが、適切な心理的対応によって、この人が他の人々の音楽的な特質を受け取り、参加者相互の協働性を高めることに意味を見出すようになると、他の参加者もそのことを理解し、全体が、音の変容を互いに受け取り合う方向へと動いて行く。これは間接的介入の有効性を論証している点で、セラピストの臨床的態度一般にも示唆を与えるものである。著者は、これらの実践から、セラピストの立場は個々の病者にとって宥和的であると同時に侵襲的でありうるが、それは文化そのものが個人に対して持っている性質と同様であるということを、フロイトの文化論を踏まえつつ洞察している。

第2部では、ミュージックセラピーの場面における音の変容について、さらに詳細な理論的展開が行われる。議論の主題となるのは、音楽と言語構造の関係性であり、即興演奏における音の協働を通して、病者が意味の共同性へと赴く道筋が理論化されている。

著者は、音楽体験の基底に存する「根源的律動」なるものが、身体的感覚から意味の領野までを一貫して支え、音楽にも言語活動にも共有されていると想定する。ある時、一般的には音楽の場であると思念されるミュージックセラピーの場に、一人の病者が落語のCDを持ち込んだのであるが、この唐突な行為を著者はそうした理論的想定の下に受容する。無意味を耐容する音楽は、意味を要求する言語活動を緩和するので、参加者は、意味を免れた根源的律動に還ることができ、場の即興性を通じて、別の意味の可能性へと開かれていく。

こうして本論文は、現在日本で行なわれている多くの音楽療法とは異なる視点から音楽活動の臨床的意義を明らかにし、音楽を、セラピストとクライアントの間に生まれては消える生きた言葉のように扱い、ミュージックセラピーの理念を確定すると共に、その実践を通して、病者を関係性の中に導き入れるための介入の時機と方法を示唆している。以上のように、本学位申請論文は、人間とその社会を環境との関わりに沿って解明することを目指した人間・環境学研究科の理念に適ったものと言える。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年12月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。